

# W・ディルタイにおける形態学的思索傾向

森 本 司

1

ディルタイにおいて、構造論的な思索の傾向が彼の研究態度の基底にあることは、概略的にはあるが、すでに以前の拙論において述べられた。<sup>(1)</sup>そこで示された構造論的傾向は、一方では、その一般化傾向のために、個別性の軽視を招き、他方では、その傾向が招く運動性はその一般化傾向を制限し、一般性と個別性との関連の追求を促すことになる。ここにおいて、構造論的傾向は、その一面性を現わし、この傾向を補う他の傾向が必要とされた。一般・全体と個別・部分との関連は、構造論的傾向だけの論考では不十分だからである。

この全体と部分と言う関連を動的にしかも内的に（つまり、全体を単なる部分の総和と見なさず）把握する思索傾向は、ディルタイにおいては、「形態学的傾向」と言うことができる。全体と部分の動的及び内的関連性は、解釈学のみで考察されている訳では、決してない。

F・ローディは、形態学的な傾向の特徴は、ディルタイの著作に一貫しているということを指摘している。<sup>(2)</sup>ローディによれば、ディルタイにおける形態学的な考察の仕方とは、「個々の諸現象の発生的連関を最終的な単純な作用法則や形成力、エンテレヒー的諸原理の方向へとたどる」<sup>(3)</sup>仕方である。その考察法の特徴の一つは、発生的に諸現象を捉えるということである。「発生的に」とは、ちょうど植物の種から芽が出て、それが伸び、葉ができて、花が咲くという一連の動的経過を言う。もう一つは、そのような現象を一般法則へと関連づけるという考察法である。「関連づける」とは、「還元する」ことではない。確かに、個別現象の中心的部分は一般法則へと還元され得るが、しかし、個別現象の個性は形式的な中心的部分にあるのではなく、その組合せと、つまり、中心的部分の変容（メタモルフォーゼ）とその付加物にあるからである。また、さらに、両者が関連する内容も生まれて来る。原型としての全体が発生し、成長することによって、様々な部分的な器官へと分化・分節して行く現象がそれである。ここには、発生的現象と一般法則とを結

び付ける、全体と部分の動的法則性が考えられる。

ディルタイにおけるこのような形態学的な思索の傾向(思索態度)にはいくつの特徴が見られる。その中でも、この傾向の中に見られる一つの特徴、すなわち、その運動性から生じる傾向は、特に別の一つの思索傾向として、区別される必要がある。発生における法則性と歴史における運動性とは、必ずしも一致しているわけではないからである。歴史の運動性と深く結び付いている思索の傾向は、「生成論的傾向」として規定できるが、ただし、これは本論文の直接の論述の対象ではない。

以上から、ディルタイにおける形態学的な思索傾向において扱われる内容は、原型からのメタモルフォーゼという、全体における部分の分化・分節の運動法則に関わる。この思索も個別を対象としているが、最終的に一般化へ向かう傾向が強い。先の生成論的な思索の傾向は、この過度の一般化傾向に対して制限の役を果たしている。

## 2

我々は、本論文では、ディルタイをゲーテの形態学に関する思索内容との関連で考察する。すなわち、ゲーテに由来する形態学的思索態度が、ディルタイのどこに現われており、それが、どのように変化したのかを最終的に、仮設的で修正可能なモデルを提示して論じる。我々は、まずゲーテにおける形態学の輪郭を示してから、ディルタイにおける形態学的な思索傾向の位置付けについて述べることにする。

ゲーテに由来する形態学の特徴は、全体と部分との関係にある。

ゲーテは形態学を、「形態の部分と全体の考察。他のことは何も考慮することなく、形態の一致と差異を考察するもの。」と規定している。しかし、この規定からは、形態の研究が静的な研究と誤解される恐れがあるので、ゲーテは『形態学序説』において次のように「形態」について述べている。

「ドイツ人は現実中存在するものの複雑な在り方に対して、形態(Gestalt)と言う言葉を用いている。生きて動いているものは、こう表現されることによって抽象化される。この言葉を用いるかぎり、相互に依存しながら一つの全体を形成しているものが固定され、他とのつながりを失い、一定の性格しか持たなくなるのはやむをえない。しかし、ありとあらゆる形態、特に有機体の形態を観察して見ると、変化しないもの、静止したもの、他とのつながりをもたないものは、どこにも見いだせず、すべてはたえまなく動いて休むことを知らないことが分かる。だから、我々のドイツ語が、生みだされたものや生みだされつつあるものに対して形成(Bildung)という言葉を普通用いているのは、十分に根拠のあることなのである。」

このようなゲーテの規定から、形態学は「形態の学」(Gestaltlehre)ではなく、「形成の学」(Bildungslehre)であるという指摘も十分に頷ける。形態学は対象を固定的に把握するのではなく、有機体の形成とメタモルフォーゼの過程を記述によって示すことを目的としている。従って、形態学の対象はあくまでも個別に限定される

が、しかし、その際個別に囚われてはならない。ゲーテによれば、対象としての個別に対する次のような態度は、避けられねばならない。

「悟性的な人間、すなわち注意の眼を個別にむけ、緻密に観察し、全体を部分に分解してゆく人間にとって、理念から生じ理念に還るものは、いわば手に余る代物なのである。……(中略)……。それに対して、より高い立場をとっていると標榜する学者達のほうは、こともなげに個々のものを軽蔑し、個であればこそ生命を保っているものを普遍性の名のもとに一括し、この生命を枯死させてしまっている」<sup>(6)</sup>

ゲーテから見れば、個別にのみ目を向け理念を見ようとする学者も、また個別を無視して理念のみを見る学者も共に、生命体としての対象を破壊していることになる。それ故個別に目を向けて、そこに普遍性を見ようという態度こそがゲーテにとって本質的に思われたのである。

個別と理念に関して、『箴言と省察』に次のような言葉がある。

「理念と呼ばれるもの、それはつねに現象として現われ、それゆえにわたしたちにとってすべての現象の法則と感じられるものである」<sup>(7)</sup>

「普通と特殊は一致する。特殊はさまざまの異なる条件のもとに現われる普通である」<sup>(8)</sup>

以上のゲーテの言葉から考えて、理念あるいは普通は、時間的に局所的な個別においてのみ現われることができる。従って、「特殊は永遠に普通の下位につく。普通は永遠に特殊に従わなければならない」<sup>(9)</sup>ということになる。

この普通こそ、ゲーテにとっては、原型概念であるから、結論として、ゲーテの形態学は原型とそのメタモルフォーゼを中心的な視点とする動的対象の記述学であるといえる。

### 3

ゲーテとディルタイとの関連については、ホフマンスタールの有名な言葉がある。

「精神的なもの、彼(ディルタイのこと―引用者注)には、それは生きたものであった。あまたの時代を潜り抜けながら、彼の眼の前では、それはつねに不変であった。ゲーテが植物の変容、動物の変容を観たのと同じような眼で、彼は精神的なものを形態の変容を観ていた」<sup>(10)</sup>

ゲーテの思索態度に深い関心を持つものには、ディルタイの思索の傾向にもゲーテと類似したものを見ることはたやすい。ホフマンスタールはこの引用文の後で、ディルタイにおける形態学的な思索態度について文学的に語っている。この文章は、歴史と結び付いたディルタイの形態学的な思索の傾向を見事に指摘している。

「ある思考様式、ある詩作様式、ある種のものの感じ方、ある刻印を帯びた世界認識それはかつて存在していたのだが、一見底辺に沈んで姿を隠したあと、再び現われてきたりするものである。

……(中略)……。そうやって彼は時代と時代とを結び付けたし、そうやって彼には歴史が一つの生きた出来事となった。もろもろの時代を紆余曲折して潜り抜けてきながら、しかも統一的存在たるを失わず、個人のなかやまた組織のなかで活動しているものがあつたとしても、それがもし詩的なものであれば、それはハンス・ザックスである。倫理的、靈的ならばルターである。思索者ふうになれば、ライプニッツである。」

さらに、これに続いて、このような形態学的精神によつてものごとを見るディルタイにとつて、哲学がいかなるものであるのか、ということをもフマンスタールは深い認識と自覚をもつて述べている。従つて、フマンスタールには、ディルタイはゲーテの精神をもつて、哲学する人物と見えた。彼はディルタイを「ファウスト博士のようなドイツの大学教授のひとつ<sup>(12)</sup>」であると述べている。ゲーテの精神がディルタイの内ではいかなる位置を占めており、またどのように変化したかを、我々は、ディルタイの主要な二つの著作の比較を通して、検討してみよう。

ディルタイには、第一巻のみ刊行されて未完に終わった著作が二

4

つある。それは、『シュライエルマッハー伝』と『精神諸科学序説』である。だが、巻数は明示されていなくとも『精神諸科学における歴史的世界の構成』(以後、『歴史的世界の構成』と記す。)にもやはり、続編がある。従つて、彼は未完の著作を少なくとも三つは残したことになる。我々はその内の二つの理論的な著作である『精神諸科学序説』と『歴史的世界の構成』の一部を比較して、このディルタイにおける形態学的傾向の位置付けがどのように変化したかを以下に指摘する。その際、その理解を容易にさせるために、仮説的で修正可能なモデルを、我々は提示する。これにより、我々はディルタイの著作の発展そのものが、形態学的傾向(原型とその変容)にあるということを最後に指摘する。

『精神諸科学序説』の序文には、ディルタイの構想の概略が述べられているばかりではなく、その後の発展の芽(すなわち、基本的な態度)が示されている。

「この学派(歴史学派のこと―引用者注)には次のような、純粹に經驗的な考察の仕方が生きていた。すなわち、歴史的過程の特殊性に対する愛情がある沈潜。個々の事実の価値をもつばら発展の連関から決めようとする、歴史考察の一般的精神。現在の生活に対する説明と規則とを過去の研究に求め、精神的生は、最終的には、どの点においても歴史的生であると見る、社会の学問の歴史的精神。」(一、XV. 傍点は引用者による。)<sup>(13)</sup>

ディルタイにおける形態学的傾向と生成論的傾向は、一八八三年

の『精神諸科学序説』のこの序文に明確に見られる。引用文の内容は歴史学派に関するものだが、ディルタイがこれを受け継いでいることはすぐ後に述べられている。傍点により強調された「特殊性」と「発展の連関」という術語は、それぞれ、形態学的傾向と生成論的傾向に固有の術語である。個別の個性（すなわち、特殊性）に目を向けて、それがどのような成長や発展をとげてきたのか、という観点から個別の個性を了解しようとする態度、これこそ広い意味での形態学的傾向にほかならない。

もちろん、この傾向だけで現実や理論を考察するのは不十分であり、この歴史学派に欠けている哲学的基礎づけという試み、つまり認識論や心理学の試みをこの歴史学派に融合させること、これこそがディルタイにとって本質的なことであった。彼は、「歴史的直観や比較的方法だけでは精神諸科学の自立的連関を樹立することも、人生に対して影響を与えることもできない」（I, XW）とはっきりと述べている。

「詳細な歴史的部分があるのは、序説にとって実際上必要であるという理由からだけではなく、歴史的自己省察には認識論的自己省察に並ぶ価値があると私が確信するからでもある。」（I, XW. 傍点は引用者による強調である。）

このように、歴史的考察と心理学的考察の二本立てについて、ディルタイはこの序文ですでに明言している。この立場は、一九〇〇年に発表された「解釈学の成立」にも受け継がれている。それ故、

単に一貫しているということだけが重要なのではなく、その二つの内容がどのように分化・分節しているか、つまりどのように発展しているのか、ということの方に意味がある。

『精神諸科学序説』における形態学的な傾向は、次の引用文によって決定的に明示される。

「この確信の正しさは、発展史的立場に立つとさらにいっそうはつきりする。なぜならば、知的発展の歴史は、太陽の明るい光りを受けた樹木の成長の記録のようなもので、地下にあるその樹木の根を、認識論的基礎づけは探り出さねばならないからである。」（I, XW. 傍点は引用者による強調である。）

「太陽の明るい光を受けた樹木の成長の記録」を観る態度と歴史を観る態度とが、ここでは同一である。すなわち、形態学的な観点で歴史を観るディルタイの態度から、ここに形態学的傾向と生成論的傾向との融合が指摘できる。

『精神諸科学序説』の序文に示されたディルタイの思索の基本的態度に基づいて、『精神諸科学序説』の第一部の前半を次に分析しよう。

## 5

『精神諸科学序説』の本論は、その著作の意図をもって開始される。この著作の意図するところは、精神諸科学に従事する人々に対して、その諸科学を構成する命題や規則と人間社会の現実全体との

関係についての知を容易にすることである。彼は学問の分類を地球儀に準え、すでに、科学として成立している自然諸科学と並んで、歴史的社会的現実を対象とする諸科学の全体を精神諸科学として提示する。この科学の方法および目的とするところは、次のように規定される。

「人類において歴史的に発展してきたもので、人間や歴史学、社会科学という名称が共通の語法に従って与えられる対象である精神的事実こそが、我々が支配するのではなく、まず把握しようとする現実なのである。経験的方法が要求するのは、次のことである。すなわち、それは、諸科学の存立そのものに即して、思惟がここで自らの課題を解決するために用いる個々の手続きの価値が、歴史的批判的に解明されること、そして、人類自身が主体であるこの偉大な過程の直観に即して、この領域の知識や認識の本性が解明されることである。」(1,5)

このようにして、『精神諸科学序説』および精神諸科学の基本的な方法と目的が素描された後、ディルタイは次にこの「精神諸科学」(Geisteswissenschaften)という術語そのものの検討に入る。歴史的社会的現実を対象とする諸科学に関して、これまでに例えば、「社会科学」(Gesellschaftswissenschaft)、「社会学」(Soziologie)、「道徳科学」(moralische Wissenschaft)、「歴史科学」(geschichtliche Wissenschaft)、「文化科学」(Kulturwissenschaft)という名称が用いられてきた。ディルタイはこれらの術語の内容が対象の範囲に比べて狭

いことを理由に、「精神諸科学」という術語を選択する。しかし、彼によれば、この術語にも次のような欠点が指摘できる。つまり、それは、その術語が自然との連関を示唆していないという欠点である。この欠点は、ゲーテの形態学的精神に基づいて思索をしている当時のディルタイにとって重大なものであったが、その欠点を有している点では他の術語も同じであるから、それらの術語の中では、自らの領域のくぎりを不完全ながらもつけているということ、

「精神諸科学」という術語が選ばれることになる。

その後、自然的過程と精神的過程との区別に関する歴史的分析が続き、そこで、精神的過程の自然的過程への非還元性が指摘される。ただし、精神的過程が相対的に独立しているとは言え、両者は併存すべきものではなく、精神的過程は自然的過程に依存している。

「精神物理的生の統一体の分析から、今や心的状態が自然の全連関に依存しているということが、より明確になる。心的状態は、自然の全連関の内に現われ、作用し、そしてその連関から再び退いて行く。従って、社会的歴史的现实に関する研究もまた自然認識に依存していることがはっきりする。」(1,17)

精神と自然との依存関係を指摘した後、ディルタイは精神的過程の分析の領域に入り、その領域を二つに分ける。彼は、特に個々の精神的物理的生の統一体の分析を「第一次の心的事実」(die psychischen Tatsachen erster Ordnung)の分析として規定し、「第二次の

心的事実」の分析である歴史的社会的現実の全体を対象とする分析と区別している。この二つの分析も、また、相対的に独立してはいないが、先の場合と同じように併存関係ではなく、依存関係にある。

「文化体系を形づくる諸事実は、心理学的分析が認識する諸事実に介してのみ研究することができる。この体系の認識の基礎をなす諸概念や諸命題は、心理学が示す諸概念や諸命題に依存する関係にある。」(I, 46)

こうして、個別を中心とする分析と個別を単位とする現実全体の分析とは、独立しながらも相互に密接に関連する。これは、心理学および人間学と歴史的分析とが連係していることを示す。このことから、『精神諸科学序説』では、自然認識と生の統一体の研究と歴史的社会的現実の分析とが、相対的に独立しながら後者が前者に対して依存関係にあるとすることが分かる。

6

一九一〇年に発表された『歴史的世界の構成』と一八八三年の『精神諸科学序説』との間には、三十年近くの開きがあるにもかかわらず、両者の構成の類似性に驚かされる。まず第一に、『精神諸科学序説』で、人間は精神的物理的生の統一体として、心理的なものと物理的なものとの両者を兼ね備えていた。その事情は、『歴史的世界の構成』でも変わらない。心理的なものと物理的なものと言う概念は、共に人間という事実から抽象されたものであって、そ

のことを自覚している限り有効に使用され得る。両概念の考察と並んで、精神と自然との関連が述べられるが、しかし、その内容は『精神諸科学序説』における場合と比べて、それほど明確ではない。確かに、基本的には精神と自然との関連は維持されているが、積極的に論述が展開されていない。このことを、もう少し詳しく述べると次のようになる。『歴史的世界の構成』における「我々は、それ自身自然であり、自然は暗い衝動として、自覚されずに我々のうちで作用している」(Ⅶ, 80)と言う表現は、『精神諸科学序説』における精神と自然との関連に基づいている。

「自然は精神諸科学の底層をなす。自然は単に歴史の舞台であるばかりではない。物理的過程やその中にある必然性、そして、その過程に由来する作用は、歴史の世界におけるあらゆる関係、つまり能動と受動、作用と反作用の底層であり、物理的世界は精神が自らの目的、自らの価値、すなわち自らの本質を表現している領域全体の素材でもある。」(Ⅶ, 119)

右に引用した『歴史的世界の構成』の文章も『精神諸科学序説』の精神諸科学と自然認識との関連に基づいている。従って、基本的な関連づけは同一であると言える。しかし、その関連は消極的になっている。それと共に、『精神諸科学序説』で「精神諸科学」と言う術語の欠点として指摘された内容が、『歴史的世界の構成』においては消えている。精神と自然との絆は切れてはいないが、その絆はもはや問題の領域に登場しない。つまり、『歴史的世界の構成』の

対象が精神的なものに限定されて来たのである。このことは、心理学の扱いにも関連しているので、その時に再び取り上げられる。

第二に、自然諸科学と精神諸科学とを分ける指標が、『精神諸科学序説』により明確になっている。『精神諸科学序説』では、対象としての精神界と物質界によって学の特性が決定されているように見える。「見える」と言う表現を使用するのは、その区別が対象によるだけであるとディルタイが述べていないからである。さしあたり、『精神諸科学序説』では、内的経験に基づくか、感覚的経験に基づくかと言う経験の相違により生じた領域の内、前者に基づく経験の独自の領域を対象とする科学が、精神諸科学であると考えられている。それに対して、『歴史的世界の構成』では、対象は科学の態度に基づいて構成されるので、対象のみが科学を分ける指標ではないと言うことが、はっきりと言及されている。<sup>(15)</sup>このことを、ディルタイは生理学を例に具体的に述べる。生理学も人間の一面を対象としている。従って、対象だけから考えれば、生理学も人間を対象としているので、精神諸科学の一部となってしまうが、実際に二つの科学を分けるのは、このような対象ではなく、対象と対象に関わる態度との両者である。精神諸科学がその対象に対する態度は外的すなわち感覚的な生の表出から内的な意味を読みとることの内にある。そして、この態度によって、精神諸科学に固有の対象が成立する。

このような精神諸科学の態度においても、自然との関わりは軽視されている。精神諸科学では、把握の対象となる過程の物理的側面は、単なる条件であり、了解の手段になるに過ぎない。つまり、物

理的側面と関連する生の表出は、その内部を捉えるための手段となるに過ぎないのである。

『歴史的世界の構成』では、このような態度についての記述が詳細に行われた後で、次のような結論が続く。

「従って、体験、表現、了解ということの連関こそ、人間を精神諸科学の対象として成立させる固有の手続きなのである。だから精神諸科学は、生、表現、了解というこのような連関に基礎づけられている。ここにおいて、我々は、精神諸科学の範囲をはっきりと定め得る標識を得る。科学は、その対象が、生、表現、了解と言う連関に基づく態度によって捉えられる場合にのみ、精神諸科学に属するのである。」(V, 87)

従って、精神諸科学と自然諸科学との分類に関して、『精神諸科学序説』と『歴史的世界の構成』との間には変化がある。この変化は、『精神諸科学序説』で、未決定であった内容が、『歴史的世界の構成』で分節化され、明確になったものと考えることができる。

第三には、『歴史的世界の構成』においては、『精神諸科学序説』と異なって、「心理学」に対する評価が逆転している。『精神諸科学序説』では、歴史的分析と並んで、「心理学」は精神諸科学における最も基礎的な学であって、歴史的社会的な生についての諸理論は、このような「心理学」的な諸概念に基づいて考察されなければならないと指摘されている。それに対して、『歴史的世界の構成』では、「心理学」と歴史的社会的な生の諸理論との関連は断絶してい



るように見える。次の引用文を見ると、ディルタイの「心理学」（と言う言葉）に対する考えが変化したことが分かる。

「ここで、さらに、このような内的なものを規定することが重要である。このことにおいて、よく犯される誤謬は、このような内的な側面を知るために心的な生の経過、すなわち心理学を持ち出すことである。」(Ⅷ, 84)

以上を総括すると、次のようになる。(一)『精神諸科学序説』における「精神諸科学」と言う術語の選択理由の欠点が、『歴史的世界の構成』で消えたこと、そして、(二)精神と自然との連関が、『精神諸科学序説』では肯定的に関連づけられていたのに対し、『歴史的世界の構成』では両者の関係は、保たれつつも注目されなくなること、さらに、(三)『精神諸科学序説』では、心理学が精神諸科学の基礎学として重要な位置を示しているのに対して、『歴史的世界の構成』ではほとんど否定的な扱いを受けていること、これらはみな同一の理由から出て来た現象である。

つまり、『精神諸科学序説』における心理学は、精神の独自性を確立しながらも、自然との連関をつねに想定して人間の生を問う根本的な学として規定されている、と考えられる。その理由は、一八九四年に発表された論文「記述的分析心理学の構想」(以後、「構想」と記す)におけるディルタイの表現にある。それは、人間の生を研究すべき心理学が、動物の生をも巻き込んでいると言うことである。<sup>(16)</sup>つまり、ディルタイにとって、『精神諸科学序説』では心

理学は自然との連関を保つ絆であったと考えられるのである。この「心理学が自然との連関を保つ絆であった」と言うことは、形態学的な思索傾向によって人間の心的事象を把握すると言うことに他ならない。ディルタイにとって、心理学は形態学と密接な関連にあった。

この点を考慮に入れると、先に指摘した三点は、いずれもこの心理学の消失と言う観点で考察できる。つまり、『精神諸科学序説』では、自然と生の統一と歴史的现象との積極的な連関が、それらの相対的独立性と共に保持されていたので、心理学が必要であったが、『歴史的世界の構成』では、それらの連関の保持よりも相対的独立性が強調されているので、心理学は表面的には消失したのである。それに付随して、精神諸科学における「対象」に関する規定も、『精神諸科学序説』では未分化であったが、『歴史的世界の構成』では明確なものになった。『精神諸科学序説』で、さしあたり対象の観点から分けられていた精神諸科学と自然諸科学は、『歴史的世界の構成』では、精神諸科学の方法や態度から固有の対象が構成されるとして、主客の統一的状态から区別されることになった。

7

『精神諸科学序説』において心理学に形態学的傾向が見られるとしたら、『歴史的世界の構成』では解釈学的な見方が代表的であると言える。この二つの傾向について、ローディはその相違を指摘している。ローディによれば、形態学的な考察の仕方とは、発芽から始まる展開を捉え、個別現象の発生的連関を単一の最終的な作用法則にまとめ上げる考察法である。これに対して、解釈学的な考察の

仕方とは、異質な諸要因の多様性に注目し、そこから統一体を形成して行く過程を捉えるものであって、その發展法則を指示するものではない。統一的複合体へと形成される多様性は、彼によれば了解されるべきものである。歴史の連関を読み取ることには有機的な變化法則を前提する必要はない。確かに、形態学も多様な個体を扱うが、ただしその場合でも多様性を個体の法則性に基<sup>(17)</sup>づいて把握しようとする。

形態学的考察法は個体を全体として捉え、その芽からの成長や發展を生き生きとした形で法則化する。その視点は、全体から出発し分化・分節の發展の構造を把握する方向で考察を進めて行く。従って、それは、分析的にならざるをえない。それに対して、解釈学的考察法は、個体を部分的単位として捉え、部分的単位間の關連を記述し、その相互作用から、個体を単位とする統一体の形成や特性を構造的に明確にしようとする。

ローディは、この二つの傾向の類似点よりむしろ相違点を強調した。形態学の見方が歴史に応用されて、解釈学の見方が成立するのではなく、両者はむしろ異質な傾向であって、この異質な傾向が混在している点に、ディルタイの不可解さが見てとれることを、彼は指摘している。

我々は、このようなローディの図式を考慮に入れつつ、それを發展させたモデルを提示して、先に示した二つの著作においてこれらの傾向がどのような關連にあるのかを指摘する。

我々は、ディルタイの思索の態度に少なくとも三つの傾向を認めることが出来る。一つは、構造的傾向であり、これについてはそ

の概略が以前に示された。二つ目は、形態学的傾向で、これは個別に視点を留めて、その發展法則を捉えると言う考察法である。三番目が、生成論的傾向である。この傾向は、個別の多様性に目を向け、その歴史の流れの中での變化に注目するもので、その本質は運動性である。そして、これら三つの傾向の組合せにより、我々は、心理学と歴史的分析あるいは、解釈学の推移を次に論述する。

結論的に示せば、一八八三年の『精神科諸学序説』の段階では、ローディの指摘した二つの傾向は、類似として、つまり、解釈学的な考察法が形態学的な考察法に依存するものとして述べられている。ここでは、形態学的考察法は「第一の心的事実」を扱う心理学に顯著であるが、さらに、個体を全体として捉え、個体の構造的發展法則を研究する立場としての「記述的分析的心理学」は、形態学的な視点だけではなく、構造的な視点も融合していると考えられる。そして、「第二の心的事実」を対象とする分析が、個人を部分的単位とし、その歴史的社会的相互作用を研究するものとして、後の解釈学的考察法と比較できる。この考察法では、異質な諸要素の統一体間の歴史的社会的現実における構造的な相互作用が主題となる。従って、ここには、構造的傾向と生成論的傾向の融合が見られる。

従って、この三つの傾向の内、構造的傾向と、形態学的傾向を融合したものが、知・情・意の連関と個体の發展とを結び付けた「心理学」であり、構造的傾向と生成論的傾向を融合したものが、構造的連関を歴史や社会の内に探求する「解釈学」あるいは「歴史的分析」であると考えられる。この図式に従えば、『精神諸

科学序説』から『歴史的世界の構成』への変化は、「心理学」と「歴史的分析」の二本立てから「解釈学」への変化と考えるべきではない。 「心理学」と言う名称の消失と見るべきである（それと共に、形態学的傾向が前面から背景へ後退したと考えられる。ヒビングハウスのディルタイに対する影響は重大であったと思われるが、ここでそのことに触れる余裕はない）。本論文は、その経過を詳細に論述できなかったが、その概略の示唆を目的としてした。<sup>(18)</sup>

単に一部のみではあったが、『精神諸科学序説』と『歴史的世界の構成』のその内部構成の類似性と内容の変化、そして、三傾向の発展と変化が、以上のように論じられるならば、我々は、(論述が粗雑なので、未だ仮説的ではあるが) その二つの著作を同じ根のメタモルフォーゼとして見ることができる。つまり、ディルタイにとって本質的であると考えられる著作の発展が、とりもなおさず形態学的であると言えることができるだろう。このような見方を取るならば、ディルタイの著作そのものの把握の仕方を、我々は、一部変更しなければならないだろう。こうした考察を可能にするための材料として、本論文は再度検討されるべき課題（すなわち、心理学と解釈学との関連についての課題と、ディルタイの理論的態度の多面性についての課題、およびその両者の関連についての課題）を提出するものである。

## 注

(1) 拙論、「ディルタイにおける『構造』概念」、哲学・思想論叢、第四号、一九八六年参照。

(2) Vgl., F. Rodi, Morphologie und Hermeneutik, W. Kohlhammer/Stuttgart 1969, S. 51.

(3) a. a. o., S. 48.

(4) J. W. V. Goethe, Die Schriften zur Naturwissenschaft (Leopoldina-Ausgabe) I Abt. Bd. 10, S. 140.

なお、引用文は、『ゲーテ全集』潮出版社による。

(5) a. a. o., S. 7.

(6) a. a. o., S. 5.

(7) J. W. V. Goethe, Goethes Werke. Hamburger Ausgabe, Bd. 12, S. 366.

(8) a. a. o., S. 433.

(9) a. a. o.

(10) H. V. Hofmannstahl, Gesammelte Werke, Prosa III, S. Fischer Verlag/Frankfurt am Main 1964, S. 55.

なお、引用文は、『ホフマンスタール選集』高橋英夫訳、河出書房新社による。

(11) a. a. o., S. 55 f.

(12) a. a. o., S. 56.

(13) I, X V n と言う表記で、ディルタイ全集第一巻十六ページを示す。コンマの後のローマ数字、アラビア数字は、その巻のページ数を示す。

なお、本論文で使用した全集は次のものである。

WILHELM DILTHEY GESAMMELTE SCHRIFTEN, 6. Aufl., Stuttgart: B. G. Teubner 1958, 1973.

- (14) Vgl., I, 35 ff.
- (15) Vgl., VII, 81.
- (16) Vgl., V, 210 f.
- (17) F. Rodi, a. a. o., S. 48 ff.
- (18) ただし、ディルタイの多面的性格をこのように単純化できない有力な証拠が、ディルタイ全集第八巻の最初の論文にある。恐らく晩年に書かれたと思われる草稿に、歴史的連関が心理学的に基礎づけられるという『序説』における見解が、再び現われているのである。  
Vgl., VII, 10 ff.

(ゆりもと・しんかぎ 筑波大学哲学・思想学系技官)